

茶の湯文化学会会報 No.17

第17号 / 1998年5月21日 発行 茶の湯文化学会
〒606 京都市左京区下鴨森本町15-0805 生産開発科学研究所内
TEL.075-702-9270 FAX.075-702-9314

『母なる文化』と茶の湯

山村賢明

『茶の構造』では、茶の湯の基層文化として、現実肯定的受容性と自然指向性と共同体集合指向性の三つの文化特性を考えた。しかし、十六世紀と言えば、既に家父長的・男権的な家制度がかなり一般化していたはずなのに、なぜ女性的・家事の領域にわたるとも言える茶の湯が、男性文化として成立したのか、という疑問に対しては、基層文化の三つの特性だけでは答えられそうにない。そこで、概念的・一般化や類型的把握を身上とする社会学的立場から、茶の湯を男性による文化として形成した日本の文化的土壌を探ってみたい。

論は、性と世代の違いを明確に意識して、牧畜社会の父性原理に対して、農耕社会の母性原理という形で明確に定式化すべきである。また、河合の父性原理・女性原理は、社会的には、母性原理・父性原理という人類に普遍的な属性によって宗教や文化の違いが産み出されたとは考え難く、宗教や文化の特性がまず歴史的に生じたと考えられる。したがって、別の一般的用語によって、その意味内容をより直接的に表現することが可能である。



T・パーソンズの「手段性」(課題達成の側面で要請される仕事の機能)と「表出性」(集団維持の面で要請される人間関係的・情緒的な機能)を考えてみる。手段性が資源調達の合理的・原理的であるのに対して、表出性は受容・慰め・融和など感情的で緊張緩和的であるから、父性原理としての切斷や識別は手段性に、

1 宗教と世界観の二類型

そのためには、日本の基層文化を西洋と東洋というようなより広い比較文化的視野のなかに置く必要がある。先行する業績を検討すると、まず、石田英一郎の理

母性原理の包摂や調和は表出性に含まれる。これまで母性原理・父性原理と呼ばれてきたものは、性別カテゴリーに頼らず、社会の二つの機能要件のいずれが重視されるかという観点から、とらえ直すことができる。つまり西洋キリスト教社会における手段性原理と東洋の表出性原理ないしは西洋の手段性文化に対して東洋の表出性文化ということである。

2 基層にある母への志向性

日本の基層文化としてみてきたものは、表出性原理として分類される。したがって、東洋における日本の基層文化の特質を明確にする必要が出てくる。改めて母の意義に注目すると二つの特徴が浮かんでくる。第一に、日本においては社会の内部で様々な形で意識的・自覚的に母が強調される。社会の公的・形式的な領域においては父-息子関係を中心とする男性的・家父長的な原理が支配しているが、それにもかかわらず、日常生活における個々人の内面的・精神的な面つまり文化としては母のものが力を持つという形でその独自の性格が作られてきた。

第二に、母なるものに対する全面的な価値評価がなされる。日本においては、母はおし

なべて善なるものとしてプラスに評価する傾向が圧倒的に強い。

したがって、東洋の表出性文化の一環としての日本の基層文化のもう一つ（すなわち第四の特性）の特性として、「母の志向性」というものを指定することができる。

3 母なる文化と茶の湯

懷石を中心とする茶の湯の家事的性格とそれが男性の文化として発達したことは、母への志向性との関係において、家事的な活動への蔑視よりはむしろ尊敬の気持ちを抱かせるように作用したと理解できる。しかしこれは、母への志向性が茶の湯の形成に寄与した一般的基礎であるにすぎない（図の①）。基層文化の他の三特性と同じように、より重要な面として禅を媒介にしての影響というもう一つの回路が残っている。まず、「絶対的無分節性」無が、生きとし生ける存在がそこから生まれ出する根元という意味で母と同一視されているという点で基層文化の影響が認められる（図の②）。同時に、禅は日常性を異化することによって茶の湯を家庭生活的次元から引き離し、自在性を究極のものとして志向する高次な精神的営みへと高めるという点で基層

文化を純化し昇華している（図の③）。

禅による基層文化の純化と価値づけに支えられることによって、男性社会日本の男たちとりわけ富裕な上層階級の男性たちは本腰を入れて茶の湯に専心し、それを高度な理念的な文化として仕上げる事ができたのではない。少なくともそれは、父性原理の支配する手段性文化の下における西洋の男性に比べて、日本の男性にとって遥かに自然な企てであったにちがいない、もともと母とは子と対をなす概念であり、母への志向は女性志向そのものではないから、日本という男性社会の男性たちにとって、母なるものに志向しつつ女性を排除するという事はなんら矛盾ではなかったはずである。

母への志向性の持つ意味の包括性と母への志向の強さを併せると、基層文化の諸特性の相対を改めて「母なる文化」と表現した方が良いのではないか。すると茶の湯はおのずと「父なる文化」を産み出した西洋の科学技術文明の対局に位置づく。茶の湯が反措定として立ち現れることに、侘び茶の今日的意義と日本の伝統文化の可能性を遠望しうる地平が初めて開けてくるような気がする。

第八回研究会報告

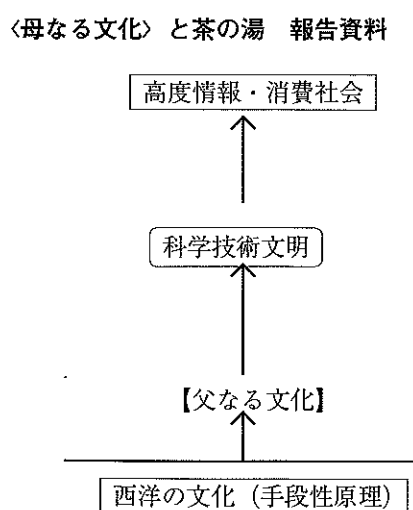
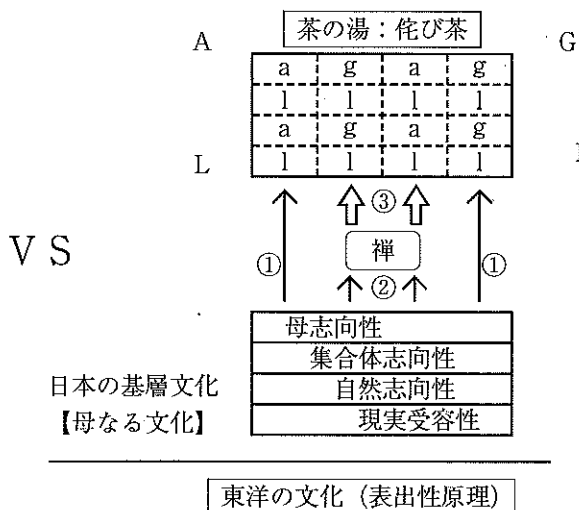
平成十年二月二十二日午後一時より、上野毛の五島美術館で、第八回研究会が開催された。東京では、二度目の研究会であったが、百四十名の参加者の中には、会員以外の一般参加者も多い研究会となった。

五島美術館には、会場の提供の他、当日の展示の無料拝観、休憩時間でのドリンクサービスなどをいただき、厚く御礼申しあげる。

倉澤副会長の挨拶の後、開催会場である五島美術館を代表して、学芸部長の竹内順一氏より歓迎の挨拶があった。引き続き、研究発表に移り、矢野環氏（埼玉大学）の「『玩貨名物記』の書誌」、谷村玲子氏（国際基督教大学）の「井伊直弼の茶の湯」、木塚久仁子氏（土浦市立博物館）「土屋蔵帳」と土屋氏の三件の研究報告と各発表ごとに活発な質疑応答があった。

また、最後に、山村賢明氏（文教大学）の「母なる文化」と茶の湯」の特別講演一件が行われた。（巻頭に要旨を掲載）

各研究報告のスケッチを編集部の責任において以下に記す。



発表1

『玩貨名物記』の書誌
『君台観左右帳記』の系譜から見えること
矢野 環

万治三年に板行された『玩貨名物記』は、名物記として著名なもので、活字化も何度かされている。矢野氏の発表は、この『玩貨名物記』の基礎的研究とも言える書誌に焦点をあてる。版行の事情は、江戸で刊行された『玩貨名物記』が、途中で、大坂でも重板され出版され、また、江戸での版も末期に版心が改刻されるといふ経緯をたどったため、大きく分けて、三種に分けられる。さらには、その三種の中でも、何度も補刻が行われていることが、明かにされた。従来は、紙の質の良さから大坂で板行されたものが、初版ではないかと推定されていたがそうでないことが、主張された。さらに、周辺の名物記の出版事情として、『茶の湯道具御寶尽』が万治元年に先行して刊行されており、これが『江戸鹿子』の『諸方名物記』の元になったこと、また、『名物 新古珍器集』は、明暦の大火で焼失した茶器の情報を載せていることなど明かにされた。その他に、一枚摺りの『茶道名器目録』の存在が、『堺市史』からわかるが、現物を

未見であるので、一枚刷りで道具名と所蔵者を書き並べたものを発見したら、是非お知らせいただきたいと、何度も強調されていた。

『玩貨名物記』の特徴としては、所有者への敬称の付け方が、特殊であるところに出版時の意図が読みとれる可能性が示された。また、内容を大幅に改編されたという説に対しては、セットになって板行されている『御師書』が、底本の乱丁をも忠実に再現したので、偽書説の発生するところとなったことを例に引き、否定的な見解をしめした。

最後に、こうした出版事業から考えて、『玩貨名物記』は、百六十年間以上にわたって出版され続け、多くが世に出回ったものとの見解が示された。

発表2

井伊直弼の茶の湯

―『茶の湯一会集』を読む―

谷村 玲子

谷村氏の発表は、『茶の湯一会集』の構成を見ると、有名な「一期一会」が記される序と「独座観念」の箇所は、全体の記述の割合からするとごく一部にすぎない点を指摘することから始まった。直弼の記述の大多数は、

詳細で具体的かつ実践的な茶事の記述である。その特色は、茶事の経過にそって主客両者の動きを同時に記してあることで、茶会の進行が鳥瞰的にわかる点にある。さらに、『石州三百ヶ条』にくらべて、貴人の条が増えている点で、主君を迎える場を想定した内容になっている。この点で武家のマナーとしての茶道の実践的な内容になっていると特徴が指摘された。

また、記述が、草庵の場に限定され、書院の場面がなく、唐物の美学が語られていないことから、小座敷にこそ利休正統の茶の湯がありそれを自分が受け継いでいるという意識が強いとの見解が述べられた。

「一期一会」、「独座観念」という概念に関して、『山上宗二記』、『南方録』、『溪鼠余談』、『交会平點規範』らの先行する茶書との関係を示しながら、直弼の最終草稿本になってそれぞれの語句が確定して登場する過程が示された。井伊家文書を利用した思想的立場の分析を通じて、谷村氏は、『茶湯一会集』は、侘茶の思想をあきらかにすると共に、茶の湯を通じて、武家たるものの文化を再構築してその継承を意図するものであった、と結論した。

発表3

『土屋藏帳』と土屋氏

木塚 久仁子

木塚久仁子氏は、土浦市立博物館の学芸員で、平成十年四月二十五日から六月七日にかけて行われる、土浦市立博物館開館十周年記念特別展「土屋家の風雅―大名と茶の湯」の準備のなかで、現存する土屋藏帳ならびに三冊本名物記を整理する過程で出てきた問題点を提起された。

第一に、土屋藏帳記載の道具が、土屋家の収集品の実体であったのかという点である。これに関しては、藏帳記載の道具と土屋政直が茶会で用いている道具が一致している点、一方、近世を通じて土屋家にあつたと思われる道具が記載されていないものもある点が報告された。

第二は、三冊本名物記は、従来松平乗邑の仕事と評価されていたがこれに疑問が呈された。木塚氏は、跋文に「土屋相州（政直）が写しおかれたるをもつてこれを写す」という文言をもつ本を発見した。この跋文の筆者「呼友亭主」は不明であるが、本文を見直すと、借覧記事が元の文章に付け加えられた形式、また、朱書きがなされていること、さらに、



松平乗邑の借覧記事が八十数点のみであることから、新たな成立の仮説も提示された。すなわち、①手控えになるものを、土屋政直が写す、あるいは整備する、②「呼友亭主」が写本を作成するが、この段階までは二冊本、③松平乗邑の補筆と、借覧記事が加わって三冊本となる、というものである。

理事会報告

平成九年度の第三回理事会が、二月二十二日（日）十二時から、五島美術館で行われた。出席理事は十一名。

倉澤行洋副会長の挨拶に続いて、平成十年度の事業計画や各種報告が行われた。

事業については、総会を六月六日（土）に東京護国寺で行い、大会を秋（十月十七日、十月十八日を予定）に京都のホリデイイン京都で行う。平成十年度第一回研究会は夏（八月を予定）に山口県の県立浦上美術館を会場に、第二回は冬（二月を予定）に京都で行いたいとの提案があった。例会はこれまで同様、東京と京都で行い、東京例会は五月から奇数月ごとに東京学芸大学で、近畿例会は七月と十二月に京大会館で行いたい、との報告があった。

また十月に中国の杭州で「国際茶文化研究会」が開催されるが、本会からも小泊、高橋両理事が報告のために参加されるので、会員の皆さんにもお知らせしては如何、との話もでた。その他、各種の報告がなされて理事会は終了した。

例会の報告

東京例会

平成九年度の東京例会が東京学芸大を会場としておこなわれました。内容の概要は左の通りです。

十一月二十九日（土）

「栄西以前の茶の湯」

中村 修也氏

従来の茶道史研究において、栄西による茶の将来および喫茶の再興ということは通説となっている。そして、栄西以前の茶の湯については、布目潮風氏の「平安朝も弘仁・天長期をピークとして、勅撰漢詩集選定の停止に象徴されるように、唐風文化は衰退し、茶のことも詩文にほとんど現れなくなる。」（『入唐・入宋僧と茶の伝来』（『茶道聚錦2茶の湯の成立』）という表現に代表される。

だが、早く池田源太氏の「上代喫茶史」にみられるように、茶の湯前史として、平安時代の漢詩・儀式書等にもみられる茶の史料の存在は知られていた。ところが、そこには古記録史料への目配りはほとんどなされていない。だが、『権記』『小右記』を部分的に検索した

だけでも、それぞれ二箇所のお茶記事が検索できるし、『台記』においても二箇所の大匠大饗における喫茶記事が確認できる。丹念な古記録の検索を続ければ、まだまだ茶の湯史料が発掘できる可能性は充分存在する。

また、これまで知られていた(季)御読経や大臣大饗の儀式は、実際には、予想以上に頻繁に行われており、宮中の茶園から産する茶だけで賄える規模のものでない。また、漢詩における茶のありかたも、あまり重視されることなく、ただ「茶」の存在を示すものとして評価されてこなかったが、漢詩の内容を検討することによって、平安期の地方への普及も読み取れるものが存在する。

一方、現在知られている、鎌倉時代の史料は金沢貞顕の書状以外には、それほどみるべきものはそれほど多くない。鎌倉時代の史料数と比較して平安期のそれが概に少ないと言えないのではないかと考える。平安期の喫茶文化衰退説は、栄西喫茶再興説に影響されたものであり、栄西再興説は、逆に千利休前後の茶人と禅宗寺院との結びつきから生じた強説である可能性も考える必要があるのではなからうか。

まず谷端氏は平安時代の『本朝文粹』から江戸時代後半の大名茶人らに至る記録を取り上げて、茶人たちが自然をどのようにとらえてきたのかを話された。

続いて谷氏は、多くの茶会記、文献を検索するなかで、茶道具の銘を分析され、その初見が十五世紀中頃である事、いわゆる「花鳥風月」にかかわる銘は元禄期頃から多くなる事、古茶会記には今日的な意味での「自然」という語が使われる事は少なく、おそらく「天然」がこれにかわる語であったのではないかなどについて報告された。

最後に、中村氏は茶の湯の建築に例をとり、木造建築は、本来自然の丸太そのものは使わないが、茶室建築には皮付き丸太などを取り入れている。それは人工的な手法が自然の摂理の微妙なものをイメージさせるからである。茶の湯における自然には、銘のようにそれに

平成十年三月二十九日

茶の湯における「懐石」の系譜

谷村 玲子氏

茶会の食事に「懐石」を用いることは、十七世紀末成立の『南方録』を初見とする。しかし江戸時代全般において、茶会の食事は一般的には「懐石」ではなく「会席」、「会膳」、「飯」、「膳」等と呼ばれ、本格的な「懐石」表記は安政三、四年(一八五六、七)完成の『茶湯一会集』を待つとされてきた。

本発表では、早くも延享元年(一七四四)以前に成立した石州流茶書『溪嵐余談』に、茶の湯における「懐石」の定義が見られることを明らかにしたが、その他の資料からも、「懐石」表記は石州流茶人に比較的に見られるといつて良いであろう。

また松平不昧、酒井宗雅、井伊直弼といった代表的な大名茶人には、共通して『南方録』の存在が見られ、また意識的な「懐石」の表記が認められる。特に宗雅は、禅院の厳しい規式に準じる「行鉢式」懐石を、天明五、六年(一七八五、六)頃より提唱していた。こうした一つの「行」としての茶の湯懐石の有り様は、嘉永年間期における直弼の『真懐石』、『直懐石』にも強く見られる特徴である。

よつて一層想念が広がるといった、現象的なもの以外に形而上的な世界が多く、自然に対する見方、掘り下げ方を変える必要があると話された。

この後、会場からの活発な質疑応答が行われて例会は終了した。

次の例会のご案内

東京例会

五月三十日(土)午後三時

場所 東京学芸大学

テーマ 「中国茶器における

釉薬調合の流れ」

発表者 水上和則氏

近畿例会

七月三十一日(金)午後六時半

場所 京大会館

テーマ 「庸軒をめぐる」

発表者 村井康彦氏

中村利則氏

坂井輝久氏他

江戸時代において「懐石」を用いた茶人は、「懐石」表記を通じて、自らの茶の湯が修行性を求めるものであることを表明していた。その中には宗雅・直弼のように、「懐石」に禅院の厳しい特異な作法一行鉢式を課した茶人がいたのである。

近畿例会

平成十年度第二回の京都例会は三月六日(金)午後六時三十分より、京都会場を会場に行われた。参加者は約三千名。概要は左の通り。

中村昌生氏 倉澤行洋氏
谷 晃氏 谷端昭夫氏

近畿例会はこれまで同様のシンポジウム形式で行われた。中村会長より、京都例会は会場の皆さんにも気楽に加わっていただく事を趣旨に研究発表形式をとらず、ミニシンポジウム方式で続けてきた。気楽に討論に加わっていただきたい、との挨拶の後、シンポジウムに移った。今回は「茶の湯と自然」がテーマ。中村昌生氏の司会のもと、谷端昭夫氏が歴史の面から、谷 晃氏が茶道具の面から、倉澤行洋氏が思想の面から、中村氏が建築の面からそれぞれ基調報告を行った。

*近畿・東京例会のご案内は会報でのご連絡のみですのでご注意ください。

総会のお知らせ

平成十年度の総会を左記の要領で開催いたします。会員の皆様のご参加をお待ちしています。

記

日 時 平成十年六月六日(土)

会 場 東京護国寺 月光殿

東京都文京区大塚五丁目四〇一

地下鉄有楽町線護国寺駅下車

(護国寺方面出口)

総 会 受付 十二時三十分より

見 学 十四時から

護国寺と茶の湯や茶室建築解説

の後、茶室などの見学、呈茶。

見学参加費 千円

*今回の参加は会員のみに限っています。出席の有無をご記入の上、五月九日までに

返事ください。

返事ください。

発表者の募集

大会・研究会の発表者を募集しています。
平成十年度大会は、十月十七日(土)、十月十八日(日)に京都で、研究会は八月二十九日(土)、三十日(日)に山口、平成十一年二月に京都で行われる予定です。

大会は一報告につき、報告二十分、質疑応答十分。研究会は報告六十分、質疑三十分程度です。発表を希望される方がおられましたら、事務所までご連絡下さい。ご連絡に際しては、大会・研究会の三カ月ほど前に、八百字程度の梗概を大会、研究会応募の別を明記して、事務所までお送り下さい。

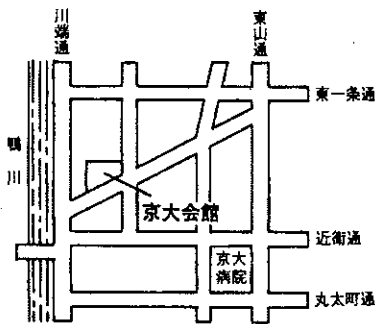
例会のご案内

近畿例会

近畿例会は、これまで同様、京大会館を会場として午後六時三十分より行われます。参加は自由です。会員の方々のご来聴を歓迎します。

- 一、平成十年七月三十一日(金)
シンポジウム「庸軒をめぐって」
村井康彦氏、中村利則氏、坂井輝久氏他

会場略図(京大会館)



京大会館

〒606 京都市左京区吉田河原町15-9
TEL (075) 751-8311(代)
FAX (075) 761-5403

東京例会

東京例会は昨年度同様に東京学芸大学(小金井)講義棟S二〇六を会場に行われる予定です。

- 一、五月三十日(土) 午後三時より
「中国茶器における釉薬調合の流れ」
水上和則氏(玉川大学)

*この回のみ、開始が午後三時、場所が講義棟N一〇一となりますのでご注意ください。

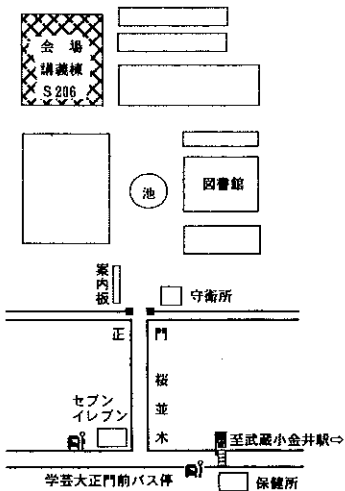
- 二、七月十八日(土) 午後二時より
「石州三百か条について」
島村芳宏氏(与野市教育委員会)

- 三、九月二十六日(土) 午後二時より
「八田円齋の技」
武内範男氏(畠山記念館)

- 四、十一月二十八日(土) 午後二時より
「三井家の茶道具」
清水 実氏(三井文庫)

*そのほか、一月三十日、三月二十七日にも例会が行われますが講師は未定です。

会場略図(東京学芸大)



*第五回国際茶文化研討会(シンポジウム)が中国杭州の中国茶葉博物館で、十月十日(金)から十二日(日)の予定で開催されます。参加ご希望の方がいましたら詳しいスケジュール等が学会事務所にありますのでお問い合わせ下さい。